

震災での間接的被災企業への新分野進出支援

支援の ポイント

- ① 金属加工技術に関するNWアドバイザーの目利き力で新製品開発支援
- ② 新製品開発のための補助金活用提案と採択実現
- ③ 新製品の性能向上のために産学官連携支援をコーディネート
- ④ 間接的被災による運転資金不足を迅速にサポート

支援の経緯

支援企業は、機械金属工業の一大集積地である群馬県東毛地区に本社工場を置く金属繊維加工技術による金属製品加工業者である。自動車機器分野向けに金属製フィルターやパッキンを製造販売してきたが、ここ1～2年は取引先からの厳しいコストダウンの要求や市場での競合先の増加などで経営状況が安定していなかった。追い打ちをかけるように3月の東日本大震災によって受注が激減していた。

このような状況に危機感を抱いた代表者は、自社の技術を応用して新分野に進出しようと考え、東毛産業技術センターの主任研究員である鍋木氏に相談に出向いた。これを受けた鍋木主任は技術センターでの技術開発というよりも技術を応用した新分野への進出がテーマであることから金属技術産業の関連分野に精通するネットワークアドバイザーの三田氏に相談を持ち込んだ。三田NWアドバイザーは早速支援企業の現状認識、経営課題の把握を行って本格的支援に入ることとなった。

支援のプロセス

支援企業は取引先からの受注型生産が主であり、技術は持っているが自社で製品開発して新市場を開拓することは難しいと感じた三田NWアドバイザーは、支援企業の技術を洗い出し、開発可能性のある商品と予想される顧客のマトリクス表を作成した。これをもとに三田NWアドバイザーの持つ関連産業の企業情報で該当する企業に目星をつけ、代表者と共に企業訪問を行うこととした。この企業訪問によって訪問企業の真のニーズを把握して支援企業の技術を応用した新しい製品開発の具体像が徐々に見えてくることとなった。

14～15社程度の企業ニーズ調査によって具体的開発製品が何点かあがってきた。その中でも商品化の優先順位の高かった「薪ストーブ用再燃焼器」を設計し試作品を完成して、群馬大学と共同で試験実施、データ把握まで行うことができた。今後、実用化に向けてターゲット企業との交渉が行われることとなる。

このような新製品の試験データの評価・分析については、支援機関である東毛産業技術センターがその役割の中心を担っている。



支援企業工場内での作業

新技術・新製品開発のための試験データの評価・分析には費用もかかるため三田NWアドバイザーは「ぐんま新技術・新製品開発推進補助金」への申請を提案し、支援企業に申請のアドバイスをを行い、6月に補助金が採択され、大学、支援機関である東毛産業技術センターとの連携が有機的に取られている。

三田NWアドバイザーが新製品開発と並行して行ったのが、震災によって間接的な被害を受けた影響による運転資金対策支援である。販売の落ち込みを短期的に乗り切るには融資制度を活用せざるを得ないと判断し、ビジネスマッチング交流会でお世話になった地元信用金庫に融資部長に働きかけ、支援企業の現状の理解と融資の協力をお願いした。その後、支援企業代表者が融資部長と面談し、融資申請を行って5月に融資が実行されている。また、日本政策金融公庫の緊急災害対策融資の申請もアドバイスして6月に融資実行に至った。

運転資金の確保によって、支援企業の新製品開発に対する意欲も向上され、代表者が開発に専念できたことは支援企業には非常にプラスになっていると考えられる。

このように、新製品開発のための企業帯同訪問、新製品開発のための補助金申請支援、2つの金融機関からの運転資金融資申請支援と多方面からの三田NWコーディネーターによる支援によって支援企業は順調に危険水域から抜け出そうとしている。代表者からは「三田さんのお陰で、待ちの構えではなく攻めの構えというものを教わった。また、三田さんの技術に対する目利き力によって実現性の高い新製品が開発でき非常に満足している」と感想を伝えられた。また、既存製品の改良支援も行い、新型のパッキングが大手航空会社から内定を受けるといううれしいニュースも入ってきている。

フォローアップ活動

新製品開発に関しては試作品段階までは到達しているので、今後は更なる性能向上、信頼性向上を実現していく計画である。そのためには支援機関である東毛産業技術センター、群馬大学共同研究推進センターでの試験を行って、実用化へのデータ蓄積が必要となってくる。その連携のための段取りは三田NWアドバイザーが布石を打っているので、スムーズにフォローアップが行われていくと考えられる。

また、今後は三田NWアドバイザーがコーディネーターとなって群馬県主催のビジネスマッチング会や金融機関主催のビジネス交流会に参加・出展して新製品のPRを行っていく計画がある。合わせて特許出願、特許登録、商標出願など知的財産の獲得についても支援していく予定である。

OJTについて

三田NWアドバイザーと東毛産業技術センターの鍋木主任とは、群馬県産業技術センターの元同僚であり、お互いにその能力を認め合う間柄である。本支援案件では、企業側から受けた相談に対して、鍋木主任は三田NWアドバイザーであれば解決できると判断し、帯同して支援企業を訪問し課題解決にあたった。鍋木主任からは「三田NWアドバイザーの技術に対する目利き力と技術活用可能性のある企業情報の確かさには非常に勉強になりました。結果的にはその部分がOJTとして指導されたと考えています」との感想をいただいた。

新製品開発支援とはどうあるべきかというテーマにおける実践的支援活動が結果として効果のあるOJTにつながったと考えられる。



支援企業代表者と討議する三田NWアドバイザー